

OCT 有用症例の事前予測についての検討

¹康生会武田病院、²康生会武田病院川村 幸士¹、野崎 暢仁¹、福田 友規¹、小網 亮¹、檜尾 和美¹、大槻 誠¹、幸野 裕里亜¹、後藤 端布¹、小笠原 悠祐¹、松本 雄賀²、木下 法之²、澤西 高佳²、中村 玲雄²、宮井 伸幸²、太田 啓祐²

【目的】 現在、PCI 時に主に使用されるイメージングデバイスにはIVUSとOCTがある。OCTはIVUSと比べ、画像分解能が高く、画像深達度が低いなどという特徴をもつ。その為、OCTは、動脈硬化の性状によっては、詳細な観察が可能な場合と観察が困難な場合がある。今回、事前に得られる患者情報から、イメージングデバイスとしてOCTが有用な症例を予測する事が可能であるかの検討を行う。

【方法】 各種検査・冠動脈造影・患者既往歴等といったイメージングデバイス決定前に得られる情報から、OCTでの撮影が有用と考えられる症例を事前に予測すべく、過去の撮影データを分析し、検討を行った。

【結果・考察】

1. 石灰化病変、2. ステントを重ねて留置している症例、3. スコアリングバルーン使用時、4. 高脂血症・高血圧等の冠危険因子を合併する症例。これら4つの項目で分析・検討を行った結果、石灰化の厚み・血管壁表層の詳細な情報・TCFAの観察等の、OCTの高解像度という特徴を活かした画像を得る事ができた。検討を行った4つの項目の情報は、イメージングデバイス決定前に得られる為、事前情報を活かし、OCTでの撮影が有用な症例の予測は可能ではないかと考える。今後、イメージングデバイス選択の際の一つの判断材料とするべく検討を重ねていきたい。